

■第128回 み言葉に生きる招き 《解説と黙想》

●第1朗読 出エジプト記17・3～7

イスラエルの民は、出エジプトの旅では紅海を渡りマナで養われ、主の恵みを何度も体験した直後、水の欠乏で二つのことを学びます。①危機の中における民の信仰。②主を信頼して生きることです。肉体の渇き以上に、命への恐れが喉の渇きとして表され、主を疑い、否定する態度が不平となり、神の善意への疑いが、渇きで殺すためか、との言葉となり、主への不信を表します。民の不満を聞いたモーセは、どうすればよいのですか、と主に叫び、群衆は彼を石で打ち殺そうとします。主は、モーセが必死に叫ぶ祈りに答えられ、公的な証人を伴わせ、奇跡が隠されないように長老数名を伴わせ、民の前を進めさせます。また、ナイル川の裁き（出エジプト記7・14-25）と紅海の救いで使った杖を用いて、命の水をもたらすと、宣言します。神が現れた場所は、神の山と呼ばれるホレブ（シナイ山）です。主は、民とモーセの前に立ち、全責任を負うことを示し、主の命令に信頼して岩を打て、と命じます。岩を打たせた理由は、①神が共におられるのを理解させる。②モーセの杖で、神の裁きと命を与えることを示す。③彼らは霊的な岩から飲んだ。（1コリント10・4）とあり、イエスは岩、打つは十字架、水は命の恵みを表します。主の恵は、人が想像できない場所からでも現れます。モーセは主の言葉に従って行った信仰が、民を救います。民の罪が地名に刻み込まれてマサ（試し）とメリバ（争い）になり、神の恵みと人の不信の記念碑となります。奇跡を何度も見たのに疑い、状況が悪化すると、主はおられないと嘆く信仰から、主は共におられる（イスマエル）ことを学びます。

●第2朗読 ローマの信徒への手紙5・1～2、5～8

ユダヤ人や異邦人は罪の下におり、律法があっても人はこれに完全には守り切れず、アブラハムは信仰によって義とされたように、人もイエスへの信仰によってのみ義とされます。この箇所では、義（正しい者）とされた者に与えられる果実は、平和・恵み・希望・愛の中に生きると語られています。自らの努力ではなく、イエスにより正しい者にされることを、信仰によって義とされると言い、これにより神との和解が成立し、平和を得ます。イエスのお陰で継続的な救いへと導かれ、終末に救いは完成し、私たちは救われて神の栄光に与ります。この希望は、神が必ずや与えてくださるとの確信がり、これを喜んで語ることが誇りなのです。希望は神ご自身が働かれ、わたしたちを欺くことがないのは、聖霊は救われた者と共におられ、イエスの十字架による神の愛が豊かに注がれているからです。自力では救いに至れず、無力で弱かったころ、神の救済計画によって定められた時、神に背を向けた不信心な者たちにも、イエスは身代わりとなって死んでくださいました。理屈では理解できても、命まで差し出して死ぬ者はいません。愛により、命を惜しまない者がいるかもしれませんが、改心前で、まだ罪人のとき、イエスは無条件で死んでくださったことで、愛を示してくださいました。

●福音書朗読 ヨハネ4・5～15、19～26、39、40～42

この箇所では、三つ救いが示されます。①イエスが永遠の命の水を与える。②礼拝は霊と真理で行われる。③イエスはメシア（救い主）である。先祖（ヤコブ）が子に与えた地は今では対立しているサマリアの町で、イエスは旅で疲れ座っておられた。正午頃、ユダヤ人との交際を禁じていたサマリアの女に、イエスは水を求めます。女は断絶状態にある相手（言葉や服装から）になぜ頼むのか、と尋ねます。イエスは、永遠の命である神の賜物を知り、メシアが誰であるかを知っていたなら、賜物の水をくださいと頼むと生きた水は与えられたであろう。女は、井戸水をくむ物を持たずに、生きた水をどのようにして入手できるのかと尋ね、ヤコブよりも偉いのか、との疑問と、井戸水の歴史を語ります。人は欲望で渇き続け、わたしが与える命（霊）の水は、内側から湧く泉となって心が満たされると、隣人愛（もろこ喜他）への生き方になると渇きはなくなります。女は、永遠の水をくださいと言う。先祖（サマリア人）はこの山で礼拝し、ユダヤ人はエルサレムで礼拝するより大切なのは、わたしを信じることです。新しいメシアの時代が到来し、子として父を礼拝する時が来る。旧約では場所を中心として礼拝が行われましたが、メシアの到来により、真の礼拝に導かれます。聖霊とイエスによる礼拝は、今がその時であり、神もこれを求めておられます。物質や場所に縛られず、神は霊であり、この霊に満たされ、命を神に向け、霊と真理で主を礼拝します。